

「ミンダナオ子ども図書館」のホームページでは写真付きで見ることができます。

●ミンダナオ子ども図書館 ボランティア研修に参加して M.H.

この研修でまず感動したのは、私達を歓迎してくれた子ども達だった。遅い時間に到着したにもかかわらず、みんなで集まって待っていてくれたことに驚き、嬉しかった。その後、荷物を運んでくれたり、部屋に連れて行ってくれる時も大人の私達を、まるで小さな子どものようにいたわり、一人に何人かが囲んで世話をしてくれたことも忘れられない。いつもは、ひとつのベットに二人ずつ寝ているのに、そのベットを私達に明け渡してくれ、自分達は床で寝ていた。どんなに一緒に寝ようと言っても首を横に振り、結局、ずっとベットを一人で使わせてもらった。ただ、断っていても、本当は嬉しいんだと友さんにお聞きしたので、最後の夜はちょっと強引に誘ってみると、やっと一緒にベットで寝てくれた。もっと早く、こうしたかったなと思った。シーツも毎晩「さあ、やりましょう」と思ったときにはきれいに敷いてくれていて、その気持ちがとても嬉しかった。そんな心配りや優しさは生活のいたるところで感じられた。食事の片付けも、お皿を奪うようにして運んでくれたり、トイレで待っていると、中の人に急ぐように言ってくれたり、順番を替わってくれたり。お母さんがいっぱい！！という感じで、甘えさせてもらった。

読み語りでの子ども達の真剣な姿にも感動した。中学、高校生位の子が、小さな子どもを相手に語りかけたり、絵本を読んだり。そんな子ども達を見て、絵本がいつも手の届く所にある生活を当たり前だと思わず、ひとつひとつをもっと大切にしていかなければいけないと思った。又、デイケアセンターの開所式のあとの読み語りの時、横から口を出して絵本読みを中断させてしまう大人に、ムツとしたり戸惑ったりしていたあの子たちの顔も忘れられない。「よくがんばったね」「これからもがんばってね」と心から応援したい気持ちで一杯だった。読んでもらう子ども達は私の知っている子どもたちの姿と重なり、子どもはどこも同じだなあと強く思った。この子達が、幸せになりますようにと祈らずにはいられなかった。

ビックビックさんのお宅では、電気も水道もない生活の体験にわくわくした。暗やみでのトイレは勇気が要ったが、みんなで大騒ぎしながら、とても楽しかった。かまどで薪が燃えている臭いで、小さい頃、石炭でお風呂を沸かしていたのを思い出し、とても懐かしかった。

ビックビックさんのデイケアセンターの子ども達ともいい出会った。
「プリンス・プリンセス」(?)のゲームや「かごめかごめ」「はないちもんめ」など、一緒に手をつないで遊ぶことができ、とても楽しかった。ただ、いきなりの私達の訪問にびっくりしている子もいて、ちょっと申し訳なかったなと思う。” あそんでくれてありがとう”という思いだった。フィリピンが貧しい国だということは聞いていた。が、この度の旅で、車がぬかるみにはまるような山道を走り、訪ねた村の家々を見た時はショックだった。

食べるものが無い。貧しいということが、ほんの少しだけわかったような気がした。働きたくても土地が無い。仕事が無い。貧しい暮らしに耐えられず、お母さんが出て行って、残された子どもと父親。地主の土地だから、自分達が食べる為の野菜は植えてはいけないということだった。どうして土地があるのに、食べる為だけの野菜さえ植えてはいけないのか。土地は誰のもの？ 誰が人間に与えて下さった？ 何の権利で必要以上のものをひとり占めしているのか？ とても悲しかった。

でも、出会った子ども達は生きていた。苦しい生活の中でも家族のことを思いやり、「お兄ちゃんがかawaiiそう」と泣いていたアロナの姿が忘れられない。

ひとりひとり、いろいろな問題を抱えながら、明るく歌い、元気に学校に通い、私達に親切にしてくれた子ども達の力強さが忘れられない。

私も与えられた環境の中で精いっぱい、自分のできることをしていこうと思う。名前は覚えられなかったが、たくさんの出会いと笑顔に感謝したいと思う。この研修旅行でたくさんの出会いがあった。が、言葉が理解できなくて相手の言うことがわからず、自分の伝えたいことも言葉にすることができなかったのが残念だった。やはり、海外に行く時には、和英辞典が欠かせないと反省した。

●フィリピン研修レポート M.F.

ある日突然！！神父様から伝えられたフィリピン研修。本当におどろいて、その時は何も考えられなかった。子どもたちと、今年のクリスマスに、ミンダナオ子ども図書館へ献金を送ったり、DVDを見たりしたことがあるのでそういう場所があるということは知っていた。しかし、実際には、ほとんど、どんな所か分からないままだった。

8月に入り…ついに出発の日。期待と不安と両方あった。だが、皆と一緒に

だということで安心を持つことができた。

フィリピンに着いてからの移動距離はとても長く、移動の半分は寝て過ごしたように思う。初日、図書館に着いた時は、眠たいまま2階へ上がった。と、そこで待っていたのは子どもたち。遅い時間にもかかわらず、私たちの歓迎のために、すてきな歌や踊りのプレゼントをしてくれた。その時の子どもたちのキラキラと輝く瞳や笑顔にすいこまれるように、見入ってしまった。今まで出会ったことのない程、本当にすてきな笑顔が、そこにはあった。心のうつくしさが表れているような、きれいな歌声。とても恥ずかしそうにしながらも歌ってくれ、私の眠気も一気にふきとんでいき、本当にうれしい夜でした。

次の日も子どもたちは、朝早くからとっても元気でついていくのがやっとだった。日本にいる時は、毎日、時間に追われ、一日にあまり余裕を感じられなかったが、ここでの時の流れはとてもおだやかで、周囲を緑豊かな自然に囲まれており、心からいやされた様に思う。

現地で、図書館の子どもたちだけでなく、多くの子どもたちと触れ合うことができた。全く知らない私たちを、どの人たちも心から受け入れてくれているようで本当にうれしかった。それと同時に、子どもたちの生活の様子を、目の当たりにし、ショックだった。日本での、生活に慣れすぎていた私にとって、その差は正直悲しかった。

そんなことを思うのは失礼な事だろうけれど、今まで見たことのない貧しい生活がそこにはあり、言葉が出なかった。しかし、どこへ行っても子どもたちの表情は変わらず、輝いていた。その村で、一緒にバスケットをしてくれた子どもたち。英語も伝わらず、会話もできなかったけれど、楽しい時を過ごすことができた。別れ際にみんなで記念撮影。彼らの心の中でずっと覚えていてほしいな。

色々な村に行き、多くの人たちを見るたびに感じる事。それは、どんなに貧しくても、今を精一杯生き抜き、心から幸せを感じているのが分かった。図書館にいた子どもたちもそうだった。皆、勉強が大好きだと言う。日本でそう答える子は、実際少ないと思う。教育を受けられて当たり前。食事や服、何もかもがあって当たり前の世界の中で不自由さを感じずに生きている私たちは、どれだけ恵まれていてぜいたくな暮らしをしているのか…という現実気付いた。

私たちにとって、何でもないこと…それは彼らにとってすごいことなのだ。だから子どもたちは、自分に与えられたチャンスを、悔いのないよう、

精一杯やりとげようとしているのだと思った。

自分が、働いて家族を養ってあげたい！！ まだ10代半ばの子どもにしてはすごい心の強さだと思う。

様々な宗教の子たちや年齢も、出身地も違う子どもたちの集団。だけど、そこには、いつも笑顔があり、優しさがあり、思いやりがあった。今の日本で失いかけているもの全てがあったように思う。みんな純粹で未来への希望で満ちている様な表情だった。ある女の子が「日本に行ってみたい。だけど不安だ。」と言っていた。確かに、この子たちが日本に来たら、人の冷たさをすごく感じると思う。この子たちが大きくなって、日本に来ることができる時には、もう少し、何の境界もないやさしい心で包まれるようになれていたら良いなと思う。フィリピンで出会った子どもたちのように日本もなれたらいいな…。彼らの笑顔が、この夏1番の思い出になりました。

フィリピンの子どもたち。それから、世界中の子どもたちが毎日、幸せに過ごすことができますように…。

●ミンダナオ M.N.

私はミンダナオでの一週間でたくさんの人に出会いたくさんの事を学びました。正直に言えば一週間も長く過ごせるか心配で、とても不安な気持ちのまま、研修を迎えていました。何より飛行機に乗るのが初めてだったため、緊張していました。飛行機では気分が悪くなってしまい、出だしが悪く、不安は高まるばかりでした。

歓迎…。(一日目)

長い時間、飛行機や車に乗ったり、みんな移動だけで疲れきっていました。疲れきった私たちが、図書館に到着すると…子どもたちが荷物をすぐに持ってくれました。2階に上がると、次の日が学校だというのに、たくさんの子どもたちが笑顔で迎えてくれました。待っていてくれているとは思っていなかったのが驚きました。さらに子どもたちは、たくさんの歌や踊り、言葉などで私たちを歓迎してくれました。すばらしい歓迎に疲れていた私たちの顔からも笑顔が自然に出ていました。子どもたちの笑顔はとてもすばらしくきれいでした。色々な事情をかかえながら生活している子どもたちの顔からこんな笑顔が…と驚きました。今思えば…その時、その時を大切に、素直に表現していたんだと私は思います。行く前の不安な気持ちは、子どもたちとの出会いで、一瞬にして取り除かれました。

食事

本格的にミンダナオでの生活が始まり、まず最初に困ったのは、食事でした。お米は、パサパサしていて、おかずの味は濃く、一週間食べ続けるのだと思うと少し不安になってしまいました。図書館の子どもたちは、おいしそうに食べていました。その食べる姿を見て、この食事がここでは、あたり前なのだと思います、我慢して食べました。日が経つごとに、食事の時に我慢していたのがウソのように、食べれるようになっていました。時々、「食べれない」と思うものもありましたが、一週間で慣れることが出来ていたようです。また、訪問先で、色々な食事を出してもらっているのに…食べれないことが何度かありました。お客様に出す食事をたくさん用意して頂いていたのに…と思う場面もありました。食事に関しては反省点がいっぱいです。

市場

二日目に、市場へ生きました。日本で言う、商店街のような所へ行きました。そこで、マロンを買いました。海外での初めての買い物だったのでワクワクしました。食べ物が売っている所へ行くと、子どもたちが果物を持って来たり、ビニール袋を持って来て、差し出してきました。最初は、何がなんだか分かりませんでした。話を聞いたところ、売っているのだと分かりました。正直、ショックでした。幼稚園児くらいの子が、必死に私たちの後ろをついてきて、大きな目で買ってとうたっていました。言葉はわかりませんでした。目や表情で伝わってきました。見るのも辛かったです。テレビや本などで見た事はありますが、実際に会って、本当にこういう子がいるんだと思いました。また、何も出来ず戸惑う自分がいました。正直、あんな小さな子どもに対して、怖いと思ってしまいました。でも、ニコッと笑顔を見せると、少し恥ずかしそうに笑っていました。その時、やっぱり子どもなんだ、と感じました。ただ、買い物に行っただけなのに、色々なことを感じる事が出来た一日でした。

読み語り

図書館の子どもたちの読み語りを見学して色々なことを感じました。

マノボ族の子どもたちは、初め、私たちから逃げていました。私たちが少しずつ近づいて行くと恥ずかしがりながら笑ってくれました。図書館の子どもたちは、一人ずつ絵本を読んでいた。一人一人が一生懸命で、その気

持ちが伝わってきました。マノボ族の子どもたちも真剣に見ていました。中には立ち上がって見ている姿もありました。日本の子どもたちと変わらないなと思いました。子どもたち同士で「見えない」と言っているような時もありました。また、年下の子に注意したり、世話をしたりと全体が協力して生活しているのだと感じられる場面もありました。

バスケットボール

マノボ族の家を見学していた時、4人の子どもがバスケットボールをしていました。自分と一緒にボールをドリブルして、とても楽しそうにしていました。古門先生も入って、6人でバスケットボールをしました。足場が悪く、土というかドロでいっぱい地面を一生懸命に走り、泥だらけになりながら必死にボールを追いかける姿を見て、ついつい、本気になってしまいました。言葉はほとんど通じずにいたけれど、心…気持ちでは通じ合っていたような気がしました。スポーツを通しての触れ合いの良さを改めて感じる事が出来ました。

デイケアセンター開所式

デイケアセンターでも、素晴らしい歓迎を受けました。私たちが到着するとたくさんの方が笑顔で迎えてくれました。開所式でも紹介して下さったり、色々な話をして下さいました。移動する時も笑顔でついてきてくれて、暖かさを感じました。何よりも、みんないつも笑顔でした。

素晴らしい経験をありがとうございました。

ルモット泊

ビックビックさんの家は、本当に電気がありませんでした。この家に人が住めるのだろうか、と思いながらも、泊まって、朝を迎えました。外に出ると緑がとてもきれいでした。外から家を見ると、ここに泊まったのかと思いました。とても丈夫に出来ていて、すごいなと思いました。すぐ近くにはバナナの木もありました。日本では考えられない風景でした。

子どもたちは休みだというのに、私たちのために来てくれていました。少し警戒しながらも、ゲームなどをするうちに仲良くなる事が出来、笑顔も見ることができ、たくさん遊べました。楽しい時間を過ごす事が出来ました。子どもたちの家を訪問した時は、ショックでした。本当にこんな所があるんだと思い、驚きでいっぱいになりました。

送別会

図書館での最後の夜は一生の思い出です。食事をする時から、泣いている子どももいて、胸が痛かったです。あっというまに来てしまった別れが辛く、もう少しいたいと思いました。子どもたちは、歌、踊り、言葉で私たちを見送ってくれました。涙がとまりませんでした。とにかく、みんなの優しさがすごく伝わって来て、我慢出来ず、泣いてしまい、ボロボロ涙が落ちて、子どもの顔が見えなくなりました。一生忘れないすてきな送別会をありがとうございました。

初めは長い一週間だと思ってスタートしたのが、短い一週間になっていました。子どもたちの毎日の明るい笑顔が見れなくなるのは、寂しかったです。でも、子どもたちの笑顔、優しさは、心に一生、しみついていくと思います。自分より、歳がいくつも下の子どもたちからたくさんのことを学びました。目には見えませんが、ミンダナオから日本へ、たくさんものを持って帰ることができました。自分自身も変わって行くのでは…と少し期待しながら、今後も、たくさんの人との触れ合いを大切に、笑顔で過ごしたいと思います。

本当に貴重な時間をありがとうございました。

●フィリピン（ミンダナオ島）研修 M.K.

初めての海外。今までの環境とは違う生活を体験するということに不安と興味がありました。

予定とは少し遅れ、夜遅く着いた私たちを、うたや踊りで迎え入れてくれたこと、とても驚きました。そのうた声はきれいで、一生懸命笑顔でうたう様子に心打たれ感動しました。眠たいだろうに「Hi!!」と抱擁を交わし、受け入れてくれたこと、とても嬉しかったです。

日本と違い、車の運転の強引さ、当たり前のように人が横断する様子に驚きました。「危ない!!」と思う場面は沢山あったけれど、意外と事故にならないことに不思議さを感じました。また、街の人たちみんなが友達のように見受けられました。通りすがりや、市場での会話。私は会話の内容を理解できるわけではないのですが、温かな表情から、そう感じました。日本人の私たちにも、通りすぎる人たち、ほとんどが「Hello!!」と、あのくりくりして澄んだ目でにこっと笑いかけ、挨拶してくれ、私も自然と笑顔でいたよう

な気がします。日本ではどうだろう…と考えると、外国人が街を歩いている、めったに声をかけることはないだろう。むしろ「あ、外国人。」と思って逆に関わらないようにするのではないかな、と思います。私なりの考えですが、日本人はリアクションが苦手で、言葉が異なる相手と関わりを持つのに抵抗を抱いているように思います。その点、フィリピンでは、体全体で私たちと関わってくれました。私も苦手な英語を並べ、アクションも入れながら自然と関わるようになっていました。

食事も生活スタイルも、慣れるのは困難でしたが、物を大切にすること、周囲の人たちと仲よしでいること、中でも一番は笑顔を絶やさないことを教えてもらったように思います。笑顔は、人を幸せにするって本当なんだと、強く思いました。

貴重な体験が出来たことを感謝致します。

●職員研修 「ミンダナオ子ども図書館を訪れて」 Y.K.

職員研修で「ミンダナオ子ども図書館」へ行くと決まり、私は初めての海外渡航でフィリピンを訪れることに不安を感じた。フィリピンやミンダナオ島、子ども図書館についての話を聞けば聞くほど、「自分の英語力で大丈夫なのか」「言葉が通じなくても意思疎通ができるのか」「体調を崩して周りの方に迷惑をかけないだろうか」と不安は募る一方だった。

研修を終えた今だからこそ感じるのは、発展途上国に対する偏見の目を持っていたということである。日本より生活水準が低い国ということで、まず、食事や治安が気になった。それまで、あまり見ていなかったニュースを見るようになり、フィリピンをはじめ、東南アジアの国名が流れると、意識して耳を傾けていた。多民族国家ならではのデモやテロ、クーデターといった紛争のニュースを見ると、例えフィリピンとは関係がなかったとしても気が気ではなかった。そして、経済的に貧しい国における民族対民族、国家対国民などの対立が目立っているように感じていた。

そんな中での出発は、心配と不安以外にはほとんど何もない状態で迎えた。神父様がおっしゃっていた「この研修はきっといい経験になる」という言葉に、かすかに期待を抱くだけだった。

16日の早朝に出発し、目的地のミンダナオ子ども図書館に到着したのは、その日の夜だった。子どもたちは寝ずに私たち一行を待っていており、車から降りた私たちの荷物を持ち、案内してくれた。私はいきなりの英語の連

続に戸惑った。そして、自分の耳が英語の会話についていけないことも分かった。しかし、言葉は通じなくても、私たちを迎えてくれる子どもたちの歌やダンスからは、暖かさが伝わってきた。そして更に、私の誕生日も祝ってくれたことには、とても嬉しくおもしろい、個人的にとっても印象に残った。他国からの訪問者を彼らは暖かく迎えてくれた。歓迎の歌やダンスが終わると、彼女たちは自分たちの部屋へと招き入れてくれた。部屋の中には2段ベッドが2つあった。彼女たちは普段1つのベッドに2人ずつ寝ているようで、1部屋に8人で生活していた。「日本では1つのベッドに1人で寝る」という日本の習慣を前もって知らされていた子どもたちは、自分のベッドを空け、1人に1つのベッドを用意してくれていた。ベッドを空けてくれた子どもたちは、床にそのまま寝ていたもので、「一緒に寝よう」と誘いたかったのだが、上手に伝わらず、頑なに拒否され続けてしまった。結局、図書館で過ごす最後の夜にようやく拙い英語が通じ1人の子と同じベッドを共有した。

子どもたちの朝は、とてつもなく早かった。日本とフィリピンの時差は1時間程度で、時差ぼけは全くなかったのだが、朝5時を回らない時間から子どもたちは活動していた。当番で全員分の朝食を作っている子どもたち、シャワーを浴びる子、洗濯をする子、テスト勉強をする子、制服にアイロンをかける子、など、6時の朝食までにできることを済ませているようだった。朝食の後もすぐに学校に行く子や、髪の毛を念入りにセットする子、まだまだ勉強する子など、過ごし方も様々だった。

図書館で生活していく中で、子どもたちとも徐々に、打ち解けられたような気がする。元々英語に自信がなかった私は、とにかく、身ぶり手ぶりが多かった。知っている英単語を並べるだけで、中学や高校で学んだ英文法などは、無視した状態だった。けれど、子どもたちは、私が言いたい事や伝えたいことを汲み取ってくれ、同じタイミングで笑ったり、ゲームや、ダンスを教えてもらったりするようになった。ここでは、出身や、言葉は、あまり関係ないのだという事が伺えた。市場で買ってきた「マロン」を手にする、何も言わず、「手は上げて」と言われるだけで、見事に着せてもらった。また、市場にもたくさんの子供が居た。子どもたちはかごに魚や野菜を乗せ、私たちの周りに「買って」と言わんばかりに寄ってきた。服の裾を引っ張る子供も居た。子どもも働かなければならない社会だということに気付かされた。

土曜日と日曜日は読み聞かせと、デイケアセンターの開所式に同行させてもらった。図書館の子どもたちは、読み聞かせの前夜、全員が集まって、誰が行くのか、どんな流れで進行するのかと、内容も子どもたち自身で決めて

いた。また読み聞かせの内容だけでなく、生活の事についても話し合いが行われていた。同じ子が偏って発言することがなく、どの子も自分たちの生活について真剣に発言していた。

図書館の子どもたちは学校が休みでも、貧しい地域の子どもたちのために読み聞かせをしていた。話に入る前に手遊びや歌で子どもたちの注意を十分に惹きつけていた。その地域の子どもたちも、だんだん前に詰めていき、後ろの方の子は立ち始め、とても興味深く見入っているようだった。

ビックビックさんがボランティアでされているデイケアセンターでは外と一緒に遊んだり、手あそびや、「おおきなかぶ」をやってみて、子どもたちの、言葉は分からないながらも、必死に聞こうとしている姿が目には焼き付いた。

今回の研修を終えて、フィリピンに対する見方が変わった気がする。フィリピンと言っても、キダパワンや貧しい地域に限定されてしまうのだが、物資に恵まれない地域でも生き生きと生活する子どもや人々の姿がとても印象的だった。日本では暇があれば音楽を聞いたり、テレビをつけて、ただ眺めているだけの私だったが、電気がない生活や、テレビのない生活を経験して、子どもたちから、歌やダンスを披露してくれる暖かさを学んだ。

また、この研修中、現地の子どもたち数名に「勉強は好き？」と尋ねると、子どもたちは決まって「Of course」と答えてくれた。私は、この答えが「Yes!」よりも強いものだと感じた。私の場合勉強が好きだと感じた事が今まで無かったので、この子どもたちの答えがとても衝撃的だった。

一週間という「長い間」と、出発までは思っていたが、いざ、研修を終えてみると、たった一週間という気がしている。まだまだ学べることがあったと思う。図書館で過ごす最後の夜は「まだ帰りたくない」と本心で思った。また機会があれば、もう一度ミンダナオ子ども図書館を訪れたいと思う。今度はもちろんもっと英語を勉強し、子どもたちともっとコミュニケーションをとれるようになってからになるだろうが、ミンダナオの子どもたちからもっと学びたいと思った。

一週間の経験を今後どのように生かしていけば良いかまだ分からないが、生かしていける場面を見つけていこうと思う。

●ミンダナオ・ボランティア研修 H.T.

私にとって、この研修は初めて体験することばかりだったように思います。

まず、初めての海外で、行く前まで家族や友人に心配され私自身も少し不安でした。そして、初めての飛行機…私は高所恐怖症で行きも帰りも飛行機にはなれることはできませんでした。日本からフィリッピン（マニラ）、マニラからダバオ、ダバオからキダパワンと、とても長い移動でした。

初日、現地ミンダナオ子ども図書館に着いた時、夜の10時をすでにまわっていたにもかかわらず、今まで移動で疲れきっていた私たちを一気に笑顔にしてくれました。日本では、まず、あのような歓迎はされたこともないし、自分自身もしたことがありませんでした。

あの歓迎は今でも鮮明に覚えていますし、一生忘れません。

二日目、子どもたちは朝の4時から起きだし、身支度を整え、部屋の掃除をし、学校へ行きました。私は、その規則正しい生活と、子どもたちの自立に驚かされました。

三日目、彼らのボランティア活動の見学をしました。読み聞かせは、日本と変わらず、手遊びなどを合間に入れて、読む所などは世界共通なのかなと思いました。言語は違い、何を言っているのか分からないけど、彼らの歌やリズムで私たちも一緒に参加し、楽しむことができました。

四日目は、デイケアセンターの開所式に参加しました。日本ではデイケアセンターというと、お年寄りが対象だが、ここでは就学前の子どもたちが対象でした。ここでも、宗教の違う人との交流を持つことができました。そして、その夜、本来ならビクビクさんの家に訪問するはずでしたが、前日に体調を崩し、一人で図書館に残ることになりました。正直とても不安でした。でも、ここにいる子どもたちのことを考えると甘えたことを言っている場合ではないなと感じました。しかし、そうは言っても、淋しい思いをしましたが、子どもたちやスタッフの皆さんが気を配って下さり、人の温もり、優しさを異国の地で体感することができました。

五日目、先生方の帰りを待っている間、日本から持って行った折り紙やシールで遊びました。そして、子どもたちは日本語に興味をもち単語でのやり取りでしたが、イヌ、ネコなど動物の名前や生活用品、挨拶など熱心に紙にローマ字で書いていました。その日は、子どもたちも学校が休みということもあり、ゆっくり休養することができました。

夜は、歓迎会の時以上にお別れ会を開いてくれました。彼らと過ごしたのは五日間という短い間なのに、ずっと前から一緒にいるようなとても濃い日々を過ごせたように思いました。最後は涙あり笑いありでしたが、彼らは私たちを出迎えてくれた時と同様に最高の笑顔で送り出してくれました。

私は、この研修でたくさんのことを学ぶことができました。人と人のつながりの原点は国や言葉や宗教ではなく、その、人と人との心の交流なのだと感じました。それは、言葉や体で表現できない何かが、私の心にもしっかりと残ったように思います。

この研修で得た、たくさんの人たちの笑顔を、今度は私の周りの人たちに与えていきたいと思います。

笑顔は、どこの国でも共通です。本当の笑顔は周りの人の顔も笑顔にしてくれるからです。

●ミンダナオ島研修について N.S.

子ども図書館

初めて子ども図書館を訪れて想像以上の大歓迎会ぶりに驚きました。子どもたちの歌声、ダンスはとってもすばらしかったです。そして、子どもたちで食事の用意を朝早く、夜にはその準備をしているのは、感心しました。

また、英語のできない私に一所懸命話しかけてくれて、最初のうちは英語のできる人をついつい探していたけど、だんだんとジェスチャーや知っている単語を並べたりとコミュニケーションができるようになりました。

ここに来るまでは「自分がしなくては…」と思っていたのに、自分よりも年下の子どもたちがいろいろなお世話してもらい、感謝しきれないくらいです。すごく暖かい心と愛情の豊かさに驚きました。そして、積極性と恥ずかしがっているのに自分の意見はきちんと言えるその姿勢には学ばされました。また、子どもたちのつらさ、悲しさがまったく感じない笑顔に感動しました。

読み聞かせに同行して

子ども図書館の子どもたちと一緒に出かけ、まず最初にびっくりしたのが、子どもたちだけでなく、大人の人たちが楽しんでいる姿です。そして、前で読んでいる子どもたちも一所懸命周りを見ながら、読んでいる姿は、感動しました。

また、そこに来ている子どもたちの住んでいる場所に、驚きました。テレビや本などで知ってはいましたが、実際に目で見ると、本当にここで生活できるのか、心配になり、だけど子どもたちは元気に明るく、過ごしているのにびっくりでした。

ビクビクさん宅で

最初、電気もない家の想像ができませんでした。だけど実際に入ってみるとランプの明かりで、食事の用意をしたり、食べたりと色々なことができ、日本で停電しただけで「なにもできないどうしよう…」と、不満ばかり言っているのが不思議です。そして、水道もないので、水を汲んでうまく茶碗などを洗っている姿はすごかったです。

フィリピンの市内を見ると華やかさもあるけど、少し奥を見ると貧困が見え、そのギャップがあり戸惑いました。だけど、その中で明るく元気に愛にあふれ、すばらしかったと思います。

今回の研修では、普通に行っても経験のできないことばかりを体験させていただいて楽しかったです。そして、自分の未熟さ、甘さが身にしみました。

●フィリピンボランティア研修を終えて

S.S.

ミンダナオ子ども図書館に職員研修に行き、短い期間にもかかわらず子どもたちと貴重な体験をさせていただきました。毎日、日記をつけていましたが、5日間の研修を終えての感想をまとめたいと思います。

全体を通して一番心に残っていることは、フィリピン子どもたちは目が強い、鋭いと感じたことでした。それは、刺々しいという感じのものではなく、生きていく厳しさを知りながらも深い愛情を携えた、やさしくて力強い瞳でした。最近日本でも格差という言葉をよく耳にしますが、フィリピンは想像をはるかに超えて貧富の差が激しく、私たちが訪れた場所の子どもたちは、衣食住が保証されず厳しい生活を送っていました。しかし、彼らは生きていくために必要な力と知恵を持っていて、その瞳は力強く、「生きて」いました。

初めは警戒して私たちに近づかない子どもも多くいましたが、歩み寄り敬意を持って挨拶をすると、喜びに満ちた表情で、「嬉しい」と目を輝かせていました。何か手遊びや歌でも歌って、子どもたちを喜ばせようと思っていたのに私の方が嬉しくなって微笑んでしまいました。そうすると、子どもたちが私の気持ちに寄り添ってくれるのです。「お友だち！」と、言っているように真っ直ぐな瞳で微笑み返してくれ、子どもたちの大きな愛情を感じました。

子ども図書館の子どもたちは、様々な地区や宗教、年齢に関係なく共同生活をしています。みんな本当に明るくて、素直で、やさしくていい子たちばかり。でも、じっと子どもたちを見ていると、一人ひとり明るさの中に深い悲しみもあるのだと判りました。初めのうちは表面的な部分しか見えていなかったと思います。そしておそらく、図書館だけで数日過ごしたのでは気付くことができなかつたことでしょう。様々な場所を訪れ、本来彼らが送っている生活を目の当たりにし、一人ひとりの子どもたちの背景が見えた時、彼らの抱えている問題に気付かされ、その心に秘めた深い悲しみを知ったのです。図書館の子どもたちは、一人ひとりが大きな問題を抱えながらも、互いに思いやり、支え合っていました。時にはぶつかることもあるようですが、素晴らしい積極性で自分の思いを相手に伝えます。ちゃんと相手に向き合っ、幾つの子だって等身大で自分を表現します。そして、お互いを認めて尊重しているのです。子どもたちの話し合いの様子を何度か見る機会がありましたが、私たちが教えられることがたくさんありました。

私は、「身の丈」という言葉をよく使います。身の丈にあった生活、身の丈にあった自分にできることをする・・・今回フィリピンに行って、この言葉の意味をずっと考えました。私にとっての身の丈とは？彼らにとっての身の丈とは？・・・今までは、自分自身で「身の丈」を決めているように思っていました。そのことがおこがましく感じられました。私は、「身の丈」という言葉の意味も深く考えず、それを使うことで、どこか自分の逃げ場所を作っているのではないか、そう思えてきたのです。

食えること、働くこと、生きること、毎日の生活において真剣に向き合うしかない彼らの現実には本当に厳しく、年齢や性別に関係なく逃げ場などありません。もちろん、そのような「身の丈」を彼ら自身が選択し、決めている訳ではないのです。しかし、彼らは逃げるところか、明るく、元気に、たくましく、また優しく共存しています。なぜでしょうか？それはきっと、彼らが目には見えない大切なものを、知っているからだと思います。物質的にどんなに苦しい状況でも、愛と希望を決して忘れず、力強く生きる力を持っているのです。幾つの子だって与えられた「身の丈」をありのままに受けとめて一生懸命生きています。もちろん、私を取り巻く状況と彼らの状況は違うので比較して考えはしませんが、「身の丈」は自分で決められることではなく、与えられているということ、そしてそれは、一見不平等のようですが、決してそうではないということに気付かされました。

幸せになりたいと誰もが願っています。その幸せのかたちは人それぞれで

すが、私がフィリピンで見た幸せのかたちは、いつも深い愛に包まれたものでした。彼らは、自分一人の幸せを願うのではなく、自分と同じように周りの幸せも願い、共感・共存することに幸せを感じていました。また、古くから受け継がれる文化と大自然への敬意を決して忘れず、それらと共存していくことを大切にし、その中にも幸せを感じていました。

彼らの瞳が強く優しいのは、自分たちにとって、何が幸せなのかをそれぞれが知っているからでしょう。また、ただ知っているというだけでなく、自分たちに与えられたものをありのままに受け入れ、その中で幸せを感じて生きているからでしょう。

帰国した今、彼らと見つめ合った時、微笑み合った時の私の目はどんな瞳だったろうかと想いをめぐらせています。・・・彼らに聞いてみたいような、聞くのが怖いような、そんな気分です。

彼らと出会って、どんな時もありのままを受け止め、その時々を自分らしく見つめて生きていきたいと思いました。その瞳が、彼らのような眼差しを持てるように、これからも自分を磨きたいと思います。

●体験から学ぶこと M.Y.

今回のミンダナオ子ども図書館の研修はとりたてて「テーマ」もなく、行き当たりばったりの感がしたとは思いますが、現地でのプログラムは松居友さんが私たちのことを考えてアレンジしてくださったもの。せっかくミンダナオまで来るのだから、貴重な体験をしてほしい…その思いから計画されていた。

もともと「学習」とは机上の勉強ではなく、体験から身につけていくもの。そういった意味では何の先入観もなく、現実の世界を体験することが新鮮で印象にも残り、身にしみて、自分のものにすることができる。

現地で体験したように日本の日常生活に比べれば不自由きわまりない生活かもしれない。しかし、期待していたように先生方はこれといって強い先入観もなく、現実の生の体験を経験されたと思う。

「学習」とは、自分で気づくことでもある。自分で気づくことが学ぶことであり、自分で学んで初めて自分のものにすることができる。英語についても、わたしたちは必要性から学んだのではなく、「しなくてはならない」から勉強していたにすぎない。今回、必要性を感じた人は自分で望んで、喜んで勉強するだろう。

ミンダナオ図書館での最後の夜、送別会で子どもたちに話したこと…。

「私たちは何をしにここに来たと思う？ 勉強しにきたんだよ。不思議に思うかもしれないけど、みんなからいろんなことを教えてもらいに来たんだよ。日本で子どもたちに教えている先生たちが何を勉強しに来たか不思議に思うだろ？ 君たちは、私たちにいっぱい素晴らしいことを教えてくれたよ。心の素直さ、美しさ、思いやり、寛大さ、忍耐、希望…数えきれないほどのことを君たちは私たちに教えてくれた。それは、私たちが忘れようとしている、とっても大切なこと。…私は世界中のいろんな所、いろんな国に行ったけど、ここが一番すばらしいと思う。だって、ここにはホントの平和がある。民族や宗教や家庭の事情や、いろんな違いを乗り越えて、みんなが仲良くしている平和な仲間がいる。君たちはすばらしいと思う。世界で一番すばらしい仲間だと思う。君たちと出会えてホントによかった。いっぱい教えてもらったよ。松居さん、リンさん、ありがとう。そして、みんな、ありがとう！ また、かならず戻ってくるからね。」

何事も基本に返ること、原点に戻ることは大切なこと。今、日本の社会は基本、原点を忘れ、共生していることも忘れ、自分さえよければいいと考えている人が多すぎる。第二次世界大戦を経験し、二つの原子爆弾を被爆し、ほとんどゼロから再生を始めた日本は、かつて貧しい中にも人を思いやる心を大切に生きていた。今、自己中心的な思いに支配され、そこから作り出した社会から、ドロドロとした膿が出ている。政治、経済、教育、医療、すべての世界で腐った膿が出てきている。

このような社会にあって、幼児教育に携わる私たちの責任は大きい。

人が人として生きていく上で、何が一番大切なのかをよく見極め、社会の間違った価値観に流されることなく、確固とした信念をもって保育にあたりたい。私たち職員も、温かい人間関係を育み、自然に人格からにじみ出てくる愛の心をもって子どもたち、そして保護者の皆さんと関わりを深めていきたいものです。

今回、ミンダナオで教えてもらったことを忘れることなく、度々思いだして、今、前の前にいる子どもたちを大切にしていこう。そして、ミンダナオの子どもたちに支援できることは進めていこう。…そのように思う。